

---

# この優しい世界の中で

砂菊博尾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この優しい世界の中で

### 【Nコード】

N 4 3 4 6 G

### 【作者名】

砂菊博尾

### 【あらすじ】

ごく普通の高校生、大峽円おおはしか。彼の周りには様々なタイプの美少女がいる。癒し系なクラスメイト・クールな転校生・可愛い後輩・ブラコンな妹……そして彼女たちは、全員が円に恋をしている。だがお約束であるかのように、円は彼女たちの行為に全く気付いていない。しかし、彼が気付いていないのは好意だけでは無くて……。恋する女の子は怖いね、と言うお話。

### 三乗音羽の日記

今日は円くんと一緒にお昼ご飯を食べました。円くんはいつ見ても素敵で、私は食べるのも忘れて円くんに見蕩れていました。そして「どうしたの？」って円くんが話し掛けてくれて、私は真っ赤になってあわあわしちゃいました。うう、変な子だって思われていませんように。

それにしても五月蠅いのは仙波さんや型月さんです。私と円くんだけのお昼の時間に割り込んで来て、厚かましくも円くんと仲良くお喋りして……。

本当、死んじゃえば良いのに、あんな雌猫たち。

「ふあ……おはよう、夏日」

着替えて部屋から降りて来た僕は、リビングでテレビを見ていた妹の夏日に挨拶をする。

「あ、お兄ちゃん！ おはようっ」

すると夏日はソファから降りて輝くような笑顔で挨拶を返して来た。相変わらずの元気一杯な妹に微笑みながら僕はダイニングへ向かう。

「今日の朝ご飯は何なの？」

「えつとねえ……えへへ、今日は愛情がたっぷり詰まった特製スープと卵焼きと食パンだよ」

百五十五センチと小柄な夏日が、丁寧に手入れされた三つ編みを揺らしながら答える。僕の隣を嬉しそうに歩く姿を見ると、我

が妹ながら可愛いなあと思う。

「ふうん、今日は特製スープなんだね。あれって不思議な味だけど、何が入ってるの？」

「——え？」

特におかしくないはずのその質問に、何故か妹は狼狽の色を見せた。

「あ、あはは、それは秘密だよー。まあ敢えて言うなら、夏日の愛情の結晶、かな」

「そうなんだ。何だか照れるね」

不思議な美味しさの秘密が聞けるかも、と思ったけれど、どうやら簡単には教えてくれないらしい。

それにしても、と思う。今更ながら妹のブラコン振りには困ったものだなあ、と。もちろん兄としては嬉しいのだけれど、妹も既に中学三年生、そろそろ兄離れをした方が良いのではと思う。

（まあ、離れたら離れたで悲しいんだろうけどね）

そう考え、一人苦笑した。

突然苦笑した僕を不思議そうに見上げる夏日の頭を優しく撫でると、僕は席につく。くすぐったそうに目を細めていた夏日も、僕が座ると向かいの席に座った。既にテーブルの上には朝食が並んでいる。

「さ、それじゃあ食べようか」

「うんつ。たと召し上がれ、お兄ちゃん」

頂きます、と二人同時に言ってから僕は特製スープを口に運んだ。一口飲んでから舌を使って味わうも、やはり何を使っているのかは分からない。

そんな僕を、ニコニコと笑いながら夏日は見つめる。

次に僕は卵焼きに箸を入れた。所々に赤い何かが染み込んでいるそれを口中含むと、少し鉄っぽい味がした。けど卵自体に砂糖が混ざっているのじゃっばい訳では無く、絶妙な味わいだっただ。

——と。

「あれ……？　ねえ、夏日。髪の毛が入ってるよ」

僕は卵焼きの中に一本の髪を発見した。指でそれを摘み、ひよいつと皿の上に置く。

「気をつけなきゃ駄目だよ？ 夏……日？」

顔を上げた僕は、凍り付いた表情で髪の毛を見つめる夏日を視界に捉えた。それは自分のミスに驚き、悔いているかのような表情だが、それも一瞬。

「あ、あはは、ごめんねー、お兄ちゃん。うん、髪の毛が入っちゃったみたい。私の奴と取り替えようよ」

「いや、別にそんな……」

僕が断る暇も無く夏日はサッと二人の卵焼きを入れ替えた。その早業を見て僕は目を丸くする。流石は陸上部のエース、運動神経は良いらしい。

「別に気にしないのに……」

気を取り直した僕はそんな呟きを零しながらトーストを噛み千切る。トーストは普通にマーガリンの味である。

「うーん……トーストは誰でも出来るから別として、やっぱり夏日は料理上手だなあ。兄としては嬉しい限りだよ」

「えへへ、そんなに言われると照れちゃうよう……」

頬を赤く染めながら悶える妹に、僕は何気なく言う。

「友達とかには作らないの？ きっと好評……」

「作らないよ」

即答だった。夏日は笑みを消して即座に答えていた。余りの否定の早さに少し驚く。

「それはお兄ちゃんの為だけの特別製だもん。他の誰にも作らないよ」

「そ、そうなんだ……。それは、嬉しいな」

戸惑いながらも言葉を返すと、今の表情が嘘だったかのように夏日は笑顔を浮かべた。そして明るく言う。

「さ、食べようよ」

そんなよく分からない雰囲気の中、僕と夏日は朝食を食べた。  
結局、特製スープの材料は分からなかった。

\*

「それじゃあ、行って来ます」

「うんっ。いつてらっしやい、お兄ちゃんっ」

妹の夏日に見送られながら僕は学校へ向かった。今日は土曜日で  
普通は休みなのだが、テストの一週間前なので補講がある。

「円くん！」

住宅街を適度な速さで歩いていると、僕は誰かに名前を呼ばれた  
のが分かった。いや、この辺りで僕の名前を呼びながら走って来る  
のは、一人だけだ。

「や、おはよう、音羽さん」

「はあ、はあ、お、おはよう、円くん」

僕が挨拶をすると、肩を上下させた女の子が頑張って挨拶を返す。  
もう少し挨拶のタイミングを遅らせた方が良かったかもしれない。

「大丈夫？　て言うか、そんなに走らなくても良いのに……」

胸に手を当てて息を整えた女の子は、首を横に振って口を開いた。  
「ふう……。えっと、そうなんですけど、円くんの姿を見つけたら  
走っちゃいました」

てへっ、と愛らしく笑う彼女の名前は三乗音羽。一年ほど前に知  
り合った女の子で、家が近くと言う事もあり一緒に学校へ通ってい  
る。とは言え恋人だとかでは無く、単純に女友達と言った感じた。

もっとも、綺麗な彼女は学年で五指に入る美少女と言われている  
女の子なので、友達でしかないのに男子連中のやつかみがあるのだ  
けれど。

本当、ただの友達なのに。

「それじゃあ、呼吸も落ち着いたみたいだし、行こうか」

「はい、行きましょう」

言い合い、二人で肩を並べて歩き始めた。

音羽さんは歩幅が小さいので、必然僕が合わせるのだけれど、何故か肩が触れ合うほど近くを音羽さんが歩くので長く伸ばされた亜麻色の髪の毛が届く。女の子に対してあまり免疫が無いので、その良い匂いがくすぐったく感じられた。

「そう言えば、円くんは最近ニユースを見えますか？」

「ニユース？ ん……どうだろう。習慣では無いけど、それなりに見てると思う。でもそれがどうかしたの？」

「はい。最近話題の“恋病現象”についてどう思っているか聞きたくて……」

「ああ、アレか」

——恋病現象。それは、ここ十年で急速に増えて来たとある事件とその犯人たちの状態を指した言葉だ。

その『恋病現象』とは、恋に病んだ女の子が恋敵または恋人を殺す事——と世間一般では言われている。オタクの間ではヤンデレと言われているらしいが、とにかくそんな事件が日本のあちこちで起きているのだ、昨今は。

「そうです、その『恋病現象』です。円くんはどう思いますか？」

上目遣いで問い掛けて来る音羽さん。どうしてそこまで真剣なのだろう？

「そうだなあ。僕は、可哀想って思うかな」

「……可哀想、ですか？」

「うん。そこまで病んでしまった女の子も、それを止められなかった当事者の男の子も、殺された女の子も……皆、可哀想だなんて思う。きっと、何処かで何かが壊れちゃったんだと思う。それも、些細なきっかけで」

音羽さんが真剣になる理由は分からなかったけど、そんな様子の彼女を見ると僕も自然と真剣になる。

「可哀想って感じるのは同情で、同情は優越感の裏返しだからそう

思っちゃ駄目なんだろうけど……それでも、やっぱり可哀想で、悲しいかな。そして、僕には理解出来ない」

そう、理解出来ない。どうして愛しているのに、殺す必要があるのだろうか？ 何故いがみ合う事しか出来ないのだろうか？

そんな僕の思いは、けれど音羽さんにとって納得出来無かったらしい。難しい表情で口を開いた。

「……そう、ですか。でも、私は理解出来るかもしれません」

「——え？」

彼女の口から出た言葉に驚く。そこには明らかな共感の念があったからだ。

「愛しい人なら、自分のモノだけにしたいって思いませんか？ 私だけを見て欲しいって。流石に好きな人を殺すのは理解出来ませんが、でも、恋敵を消してやりたいと言うのは……分かる気がします」

「——」

その瞬間、僕にはまるで音羽さんが別の生き物になったように感じられた。姿形は変わってないのに、何か決定的に変質したようなそれは、まるで——

「とは言っても、やっぱり怖いとは思いますがね」

僕が一つの単語を頭に浮かべた途端、音羽さんが元の雰囲気に戻った。いつもの柔らかい、暖かな陽だまりのような雰囲気。

だから、苦笑する彼女に対していつも通りに話し掛ける事が出来た。

「ふうん。やっぱり男と女じゃ、感想も違ってくるのかな。けど、さっきの口振りだと好きな人がいるみたいない方だったね」

「はい、いますよ。私だって恋する乙女です」

僕は驚いた。何となく彼女はそう言った事に疎く感じていたからだ。でも確かにそれは僕の勝手な思い込みでしかなくて、彼女もまた恋をして当たり前な女の子なのだ。

「へえ、いるんだ。何か意外だね。もしかして、もう彼氏だったり

する？」

「いいえ、残念ながら片思いなんですよ。アプローチはしてるんですけど、中々気付いてもらえなくて」

何処か哀しげな、それでいて優しげな表情と言葉で更に驚かされる僕。意外だった。彼女が片思いをしているのも、彼女のアプローチに気付かない男がいる事も。

「うーん、うちの男子なら、音羽さんに告白されたら一発で了承しちゃうと思うけどな。音羽さんって可愛いし」

何気なく言うと、音羽さんは顔を真っ赤にしてあわあわし始めた。そんな様子を見て、流石に率直過ぎたかな、と少し反省する。

「か、可愛いだなんてそんな……恥ずかしいです。……けど、本当に、その男の子が可愛いってだけでOKしてくれる人だったら良かったんですね……」

コミカルな空気から一転、しっとりとした空気が流れる。

「その人は優しく、ただひたすらに優しく、温かくて、安らげて……自分は惜しみ無く相手に好意を向ける癖に自分への好意には疎い、そんな人です」

音羽さんの表情を見て、思った。本当にその男子が好きなんだなと。その、愛しさが溢れ出た暖かな面差しを見て。

そんな風に思った。

「もつとも、そんな人だからこそ好きになっただけですけどね。でも、流石に鈍感でちよつと困っちゃいます」

「そつか。大変だね、音羽さんも。それにしても酷いのはその男子だよな。音羽さんがこんなに想ってるのに気付かないなんて、どれだけ鈍感なんだよって思うよね」

「……えっと、円くん？ その言葉は、きっといつか円くんに戻って来ますよ？」

「うん？ と言う事？」

僕が首を傾げると、諦めたように音羽さんは溜息を吐いた。何だろつ、その反応は。まるで僕が鈍いみたいじゃないか。

「あのですね、円くん。私は円くんと一緒に毎朝学校へ行つて、お昼ご飯もよく一緒に食べますよね？ 下校時も、時間が合えば私の方から誘つて帰りますよね？」

「ん、そうだね」

「それを鑑みて、何とも思いませんか？」

言われ、考える。友達ならば普通にするだろうから、特におかしな点は無いはずだ。

（特に何とも思わない、よね？……あ）

ふと僕はそこで思った。

「そう言えば、こんな風に僕なんかと一緒にいて良いの？ その好きな人に勘違いされるんじゃないの？」

「……」

それを聞いて。

今度こそ音羽さんは絶望的な表情になつて肩を落とした。

「もう、良いです。ええ、それが円くんですから」

「えっと、何だかよく分からないけど、ごめん」

取り敢えず謝つたが、それでも音羽さんの態度は変わらなくて。

結局、そんな雰囲気のまま僕と部活のある音羽さんは玄関で別れた。

## 型月夜の日記

うつむ…… やっぱり円先輩は鈍ちんチャンピオンなのです。これだけ露骨に好意を示しているのに気付かないなんて……。まあそこが可愛い所でもあるのですが、恋する乙女の私としてはもう少し鋭くなつて欲しい所。

それにしても今日は特に雌犬の仙波乙女が邪魔でした。せつかく待ち伏せしていたのに、いきなり割り込んで来て……。円先輩の隣

にいるのは私だけで良いのです。ぺったんこで小さな私ですが、幸いにも円くんは年齢を気にしこそすれ外見を気にはしません。一歳年下の私なら充分に許容範囲のはずです。

そう、たとえば三乗音羽が破壊的な二つの膨らみを持っていようと仙波乙女がスタイル抜群だろうと、私は負けないのです。

ああいえ、でもいつその事――

呪い殺しちゃうのも良いですね

「あれ？ 夜ちゃん？」

僕は一階から二階へ向かう踊り場で一人の女の子を見付けたので声を掛けた。靴の色から一年生だと分かる彼女は、とある事情で知り合った女の子だ。

「あ、円先輩ではないですか。おはようなのです」

こちらに気付いた女の子、型月夜ちゃんはパタパタと走って僕の所まで来た。百五十センチギリギリの彼女は、やっぱり高校生にしては小さいよなあと思う。

「ん、おはよう。どうしたの？ こんな所で。待ち合わせ？」

「いえいえ、これから教室へ行こうと思っていたのですよ。それにしても偶然ですね、円先輩」

「そうだねー。この時間に会う事って少ないからね。休み時間に偶然ばったり、って言うのはよくあるけど。そっちの方が偶然にしては多いよね」

そう。彼女、型月夜とは何故か休み時間に良く会う。図書室や学習室、廊下など、学校で会っている時間なら一番長いかもしれない。「それは私が円先輩の行動を逐一観察しているからなのです。行動パターンは全て把握しているのです」

「あはは、面白い冗談だね」

「ふふふっ、なのです」

僕は笑って、夜ちゃんは可笑しそうに笑った。彼女は口調からも分かる通り、中々面白い人格をしている。こんな感じの女の子も良いなあと思う僕は、気が多いのだろうか。

いや、好きな異性は特にいないのだけれど。

むしろ、親友がもう一人はいても良い気がするけど。

「ところで円先輩。先輩は今日も三乗先輩と一緒に昼を食べるのですか？」

「んー、どうだろ。よく分かんないけど、そうじゃないかな」

「では私も一緒にしたいのですよ。手作りのお弁当を先輩に食べて欲しいのです」

おずおずと伺うような態度。とは言え断る理由も無いので僕はあつさりと頷く。

「別に全然構わないよ。あー、て事は教室じゃなくて屋上とかの方が良いかな？」

音羽さんと食べる時は教室が多い。隣のクラス、と言う事もあるが、席が確保しやすいし早く授業の準備が出来るからだ。

とは言え流石に一年生が二年生の教室へ来るのは勇気がいるだろうから、僕としてはそれを考慮した上で一般解放されている屋上を選んしてみた。

「私は気にしないのです。ただ、円先輩がそうした方が良いと言うなら、それで良いと思います」

「うん、じゃあ屋上にしよう。移動が面倒だけど、夜ちゃんも二年の教室は気まずいだろうし」

そう言うってから何気なくポンポン、と頭を撫でた。特に意味は無かったのだけれど、

「……円先輩は、優しいのです」

不意に、夜ちゃんが僕に軽く抱き付いてきた。まるで僕が此処にいるのを確かめるかのように。そしてポツポツと夜ちゃんは言葉を紡ぐ。

「あの日も、先輩は優しくて勇敢だったのです。新入生オリエンテ

「ーションで合宿へ行つた時、説明役として来ていたのが先輩で良かったのです」

「……」

夜ちゃんが言っているのは、あの時の事だろう。

——数ヶ月前、学校主催の新生オリエンテーションがあった。そしてその合宿所で、恐らくは前代未聞の事件が起きた。

火事である。

合宿所の宿泊施設の調理場から出火し、夜だった事もあり気付いた頃には煙が大量に発生していたのである。

殆どの生徒は動揺しながらも非常口から脱出したのだが、たった一人だけ逃げ遅れた女の子がいた。

それが彼女である。

深く深く眠っていた彼女は、その矮躯も相まって誰にも気付かれなかった。信じられない事だが、同じ部屋の者たちもかなり動揺していたのだろう。実際、点呼の時にいないと気付いた時に同室の少女たちは泣きじゃくり激しく悔やんでいたのだから。

「後で聞いたのです。先輩は私が取り残されていると聞いた瞬間、迷わず疾走して水を被り建物に突入したと。見ず知らずの私を助ける為に、です」

「そんなに格好良い話じゃ、ないさ」

そう。単純に取り残された女の子がいると聞いた瞬間、身体が勝手に動いていたのだ。

それでも、夜ちゃんは首を左右に振る。

「いいえ、先輩は格好良かったのです。燃え盛る炎と煙を見て怯えていた私を勇敢に助けに来て、そして優しく抱き締めてくれました」

「……」

どんな超人だと思ったけれど、確かに客観的に見ればそう見えただろうから何も言えない。あの時は、きっと、あらゆるステータスが五割増しだった。

「あの時の事を私は一生忘れないのです。だから私は先輩に感謝し

ているし、だから私は――」

最後の言葉は小さくで聞き取れなかったけれど、感謝していると  
言われて困った。見過ごせば後悔すると言っ、ただそれだけの自己  
満足に過ぎなかったのだから。

もちろん、そんな余計な事は言わないが。せつかくの綺麗な思い  
出を壊す理由も無い。

「先輩は、優しいのです」

もう一度言っ、夜ちゃんは僕から離れた。ちなみに割と朝の早  
い時間なので、人通りは少ない。それでも通る人はいたけど、僕が  
夜ちゃんを助けた事は学校中に知れ渡っているので『抱き付いてい  
る』のを見ても温かく微笑むだけだ。

まるで恋を応援するかのような視線だったけど、そんなはずは無  
いので単純に微笑ましいのだろう。僕と兄妹に見えるのかもしれない。

「何だかしんみりしちゃったのです。申し訳ないのです」

「いや、そんな事無いよ。夜ちゃんは可愛いから、こうして一緒に  
いられるだけでも嬉しいし」

すると、夜ちゃんはこちらを見ながらも色白な肌を赤く染めてし  
まった。その反応を見て、率直過ぎたかな、と再び反省する。

「そう言う科白は、勘違いしちゃうからやめて欲しいのです……」

「？ 何て言っただの？」

小さくて聞き取れなかったので尋ねたのだが、僕の問いに夜ちゃ  
んが答える前に凜とした声が割って入って来た。

「今日も早いのだな、円。やはり男子たる者、規則正しい生活をせ  
ねばいけないと私は思うのだよ」

その声を聞いて、何故か夜ちゃんが音源へハッと顔を向けた。そ  
の際に彼女の金髪のツインテールが揺れる。

「仙波乙女……先輩」

「あれ？ 仙波さん？」

重なる僕と夜ちゃんの声。夜ちゃんの声が硬いのは気の所為だろ

うか。

「うむ、私だよ、円。奇遇だな、こんな時間に会うとは」

二人分の言葉に、いきなり現れた美人な女の子は優美な笑顔でそう答えた。

夜ちゃんに続いて奇妙な言葉遣いをするこの少女の名前は仙波乙女。僕のクラスに転校して来た女の子であり、財閥のお嬢様にして剣道の有段者だ。僕らの学年では音羽さんに並んで人気がある。

「いつもは教室で最初に会うから、少し珍しいな、ここで会うとは」

「まあね。きょうはほら、偶然、夜ちゃんとばったり会ったし」

僕が夜ちゃんに視線を移すと、そこに至りようやく仙波さんは小さな一年生へ視線を向けた。そして艶やかな黒髪のポニーテールを一度揺らし、その口の端を吊り上げる。

「ああ、余りにも小さくて気付かなかったな。おはよう、型月」

「ええ、おはようございます、仙波先輩。相変わらず意地が悪いのですね」

対する夜ちゃんも睨むような表情で仙波さんに言葉を返した。

「私は本当の事を言っただけさ、意地悪などでは無いよ」

「そうなのですか？ では単純に貴女の身長が高すぎただけと言う事ですね、圧倒的に」

二人は軽口の応酬を繰り返す。この二人はいつもこんな風に、仙波さんがからかい夜ちゃんが返して言い合うのだ、子供の口喧嘩のように。

とは言え二人とも楽しんでいる節があるので、これが彼女たちなりの挨拶なのだろう。流石に陰悪さゆえの口論なら止めている。

それにしても面白いのは対照的な二人だと思う。

夜ちゃんとても小さくて幼い感じがして、仙波さんはモデルのように背が高くスタイル抜群だ。この学校で最も対照的な二人と言って良いだろう。

「ふん、小さい者の僻みだな。自分の身体にコンプレックスを持っているのはそっちだろうに」

「いいえ、違うですよ。小さくてぺったんこなのも一つのステータスなのです。それに、私の想い人はその程度気にしないから構いません」

「ほう。では試しに聞いてみようか。——なあ円、お前は私と型月どちらが好みだ？ 男として率直な意見を述べてくれ」

「私も是非とも聞きたいですよ」

と、何故かいきなりこちらに矛先が向いた。答えを間違えるとそのまま突き刺されそうなそれに対し、僕は何も考えずに素直に答える。

「ん？ 夜ちゃんは可愛いし、仙波さんは綺麗だと思うよ。個人的にはどっちも凄く魅力的だから、うん、二人ともそのままでいて欲しいかな。好みでは言えば、だからどっちも好きだよ」

「……」

「……」

微笑んで答えたそれは偽り無い本音だった。そしてどうやら率直過ぎたらしく、またしても僕は二人の少女を赤面させてしまった。

いや、今回は何故か諦観も付属しているようなのだけれど。

「全く、相変わらず優しくて卑怯だな、円は。そんな微笑で言われたら何も言えないじゃないか」

「ふう。やっぱりこれが円先輩クオリティなのですね、いつも通りに」

何だろう、何故か物凄く莫迦にされている気がする。

（それに、朝から随分と諦観されてるよね、僕。そんなに鈍いのかな？）

僕自身は鋭いつもりなのだが、違うのかもしれない。

「それでは私はそろそろ行くですよ。また後で会おうなのです」

「うん、分かった。また後で、夜ちゃん」

微笑みへと顔を変えた夜ちゃんは、そう言って僕の前から去って行った。次に会うのは昼休みの食事時だろう。

「では、私たちもそろそろ行こうか、円」

「ん、そうだね」

夜ちゃんが見えなくなつてから告げた仙波さんに頷くと、僕らは二階にある教室へ向かった。

「なあ、円」

「どうしたの？ 仙波さん」

廊下を歩いていると、仙波さんが不意打ち気味に声を掛けて来た。「以前にも聞いたが、やはり円には未だ好きな異性などはいないのか？ お前の傍には三乗や型月、それに世間一般で綺麗だと表される私がいるだろう？ いや、私たちだけに絞らなくとも、この学校には同性から見ても魅力的な婦女子が多い。その中で特別な相手はいないのか？」

「うーん、音羽さんや夜ちゃんにも聞かれた事があるし、仙波さんにも以前聞かれたけど、特にはいないかな。三人の事はもちろん好きだけど、恋愛感情とは違う気がする。そもそも、僕はそこまで恋人が欲しい訳じゃないし」

スラスラと答えた僕の言葉が納得出来ないのか、更に仙波さんは問いを発する。

「だが、やはり男子なら異性への興味はあるだろう？ それを満たしたいとは思わないのか？」

「いや、思わないと言えば嘘になるよ。でも、周りよりは淡泊だろうね。少なくとも、今は恋人なんて必要無いし。音羽さんがいて、夜ちゃんがいて、仙波さんがいて、妹がいて、春一がいて、その中に僕がいて……それだけで、幸せだから」

そう、僕は今、とても幸せなのだ。大好きな人たちに囲まれて何不自由なく生きている現在が。この優しい世界があれば、他に何かを望む必要なんて無い。

ちなみに、春一とは本名を鏡月春一と言って僕の唯一の親友だ。美形で運動神経抜群な上に学年トップの超人である。今は海外旅行の最中だ。

「そつなのか……。それは、初めて聞いたな」

「うん、だろうね。僕も話したのは仙波さんが初めてだし」

感慨深い吐息と共に吐き出された言葉に何気なく返すと、仙波さんは驚いたような表情になった。

「あはは、どうしたのさ、そんなに驚いた顔をして」

「いや、その、円が他の二人では無く私にだけ話してくれた、と言うのが意外で……」

珍しくしどろもどろになる仙波さんを横目で見つつ、頬が照れから赤くなるのを自覚しつつ僕は言葉を返す。

「何て言うか、仙波さんはこの間知り合っただけとは思えなくてね。何でも話せる、って気持ちになっちゃうんだよ」

「……」

僕は仙波さんの表情が凍り付いたのにも気付かず、照れ隠しの笑みを浮かべていた。

そんなこんなで、僕と仙波さんは教室に着いた。

## 仙波乙女の日記

今日は本当にびっくりした。まさか円があんな事を言うとは思わなかったからだ。

——数週間前に転校して来た私だが、実は円と会うのは初めてでは無い。まだ幼子であった時、既に私は円と出会っている。父の子飼いの部下が調べた通り、円は私の事を忘れていたけれど。

そんな円が“この間知り合っただとは思えない”と言っただけから、私の驚きは万人が理解出来る事だと思う。どうやら昔の感覚を思い出しているようだ。或いはもうしばらく一緒にいれば完全に思い出してくれるのも夢では無いだろう。

だからこそ、邪魔なのはあの煩わしい雌豚たちだ。型月夜に三乗音羽、あの二匹が何よりも五月蠅い。私の幼少からの恋愛成就にお

いて、一番の障害だろう。

そう。だからもし、二人が真に邪魔になるなら……

私の刃で、二匹ともぶち殺してやる

退屈な授業の前半が終わり、お昼休みになった。僕は机の中に教科書などを仕舞ってから教室を出る。もし音羽さんが僕をお昼に誘う気なら、既に廊下にいるはずだからだ。

案の定、教室を出ると音羽さんが立っていた。

「あ、円くん。今日もお昼と一緒に食べませんか？」

「うん、良いよ。それでさ——」

僕が屋上で食べたいと言うと、音羽さんは首を傾げながらもこくんと頷いてくれた。

——そして、五分ほど歩いて屋上にたどり着く。

この学校の屋上は、完全解放されているから当然金網がある。しかしそれを抜きにしても空気は良いし外の景色を眺められるので、割と人気のスポットなのである。

僕は屋上に着くと、すぐに小さな人影を見付ける事が出来た。どうやら向こうも気付いたらしく、トコトコと駆け寄って来る。

「こんにちはなのです、円先輩。お待ちしていたのですよ」

「や、夜ちゃん。待たせてごめんね」

僕が円ちゃんと言葉を交わすと、背後から声が聞こえた。

「……型月さんとも一緒に食べるから、屋上にしたんですね、円くん」

聞こえたのは音羽さんの声だったけれど、不思議な事にその声は硬い。もしかして夜ちゃんも食べる事を言い忘れていたからだろうか？

「あー、ごめんね。言い忘れてた。うん、そうだよ。夜ちゃんがお

弁当を食べて欲しいって言うから、じゃあ一緒に食べようって約束したんだよ」

「そう、ですか……」

呟いて黙り込んだ音羽さんに疑問を感じながら、僕は二人を適当な場所に促した。地面にレジャーシートを敷いて座る頃には既に音羽さんも普段通りだったので、奇妙な不安感の僕への所為だったらしい。

「さ、それじゃあ食べようか」

僕たち三人の前には、それぞれの弁当箱が置いてある。音羽さんと夜ちゃんは女の子らしい弁当箱だが、夜ちゃんの方が若干なめだ。

そして、僕の目の前には三つの弁当箱が置かれていた。

「……って、そう言えば、僕って三つの弁当を食べる事になるんだよね」

今更ながらにその事に気付く、僕はお腹が心配になって来た。ちなみにいつもは音羽さんが作ってくれた弁当と妹の弁当の二つである。どちらの好意も無下に出来無かった結果だ。

更に言えば、いつもはそれでお腹がほぼ一杯になる。

「大丈夫ですか？ 円くん。何だったら私のお弁当は食べなくても良いですよ」

「私も、無理なら遠慮しないで言っただけなんですよ」

——とは言え。二人の心配そうな表情を見て弱音が吐けるはずも無く。

「いや、大丈夫。この位、平気さ」

僕は笑顔で二人に答えていた。

「それより、食べようよ。お昼時間は限られてるし」

二人を促すと、それを受けて彼女たちも自分の弁当に向き直った。

「それじゃあ、頂き——」

「すまないが、私も混ぜてもらえないかな」

ます、と言おうとした時、再び背後から声が聞こえた。しかし今度の声は凜とした響きがある。

「この声は、仙波さん？」

言いながら振り返ると、そこにはやはり仙波さんがいた。その手には包まれた弁当箱らしきモノがある。

「ああ、私だ。その、円も含めた三人と交友を深めたいと思って来たのだが、駄目だろうか？」

仙波さんの問い掛け。僕たちはそれを肯定か否定する権利を持っていたけど、当然ながら否定出来るような人格の人間がいる訳も無く。

「私は……円くんが構わないなら、良いですよ」

「私も、仙波先輩は好きではありませんが円くんが良いと言っのなら別に構いません」

（あれ？　もしかして、二人とも僕がいなかったら断っていたっばい？）

二人の科白からそんな事を考えたが、もし僕がいなくても二人は優しいからきつと了承するだろうと考え直した。そもそも断る理由が無い。

（夜ちゃんも、何だかんだ言って仙波さんを嫌ってる訳じゃないと思うし）

とにかくここに来て僕の言葉一つで決まる、と言う状況になった訳だが、当然ながら僕の言葉は決まっていた。

「もちろんだよ。一緒に食べようよ」

その言葉を聞いて。

とても嬉しそうに、仙波さんは笑った。

左右を見ると、僕に微笑を向けてくれる音羽さんと夜ちゃんがいる。

そして、僕の手には妹の手作り弁当。

それは、とても幸せな風景だった。

ふと見上げた空もどこまでも青く澄み切っていて、心地良い風が吹いていた。

——ほら、世界はこんなにも優しい——

## 大峡夏日の日記

えへへ、今日はお兄ちゃんに特製スープと特製の卵焼きを出しちやった。お兄ちゃんに材料を聞かれた時や髪の毛が入っていた時は焦ったけど、お兄ちゃんに満足してもらえたから無問題。

だつて、言えないもん。特製スープには私の爪の摩り下ろしと切り刻んだ髪の毛と愛のジュースが材料に含まれている、なんて。

けど、えへつ。お兄ちゃんつては確かめるように舌で味わってくれて、嬉しかったなあ。お兄ちゃんの身体に私の一部が溶けて一つになつて……ああ、想像しただけで切なくなっちゃった。これを書いたらお手洗いに行かなきゃ。

それはそれとして、取り敢えず邪魔なのはあの泥棒猫三人組だよな。三人ともすっかり私を無害な妹だと思つて油断してるから、そろそろ罠を仕掛けなきゃ。えへつ、どんなのにしようかなあ。殺し合うように仕向けようかなあ。私が殺しちゃうとお兄ちゃんと会えないもんね。

待っていてね、お兄ちゃん。必ず幸せになろうね。

（後書き）

一度書いてみたかったヒロイン全員ヤンデレな小説。短い中で如何にキャラの個性を出すか考えました。さて、貴方のお好みはどのヒロイン？私はもちろん妹です。

この短編が一時の暇潰しになったなら、幸いです。では、これにて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4346g/>

---

この優しい世界の中で

2010年10月8日10時53分発行